

1. 教育・学習に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいるか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	看護学科の教育課程は、保健師助産師看護師学校養成所指定規則に則った看護師及び保健師の養成カリキュラムに加え、看護学科カリキュラム・ポリシーに基づいた授業科目を配置し、1年次から体系的に積み上げて看護を学ぶことができる編成になっている。令和4(2022)年度から新カリキュラムでの教育を実施しているが、平成29(2017)年カリキュラム課程の学生も混在しているため、学生個々の履修計画と実施が必要であった。 保健師課程については4年次での履修が過密になるため、一部の科目を3年次後期に開始し、応用実習と調整しながら実施できている。 令和4年度から全学として開始した、「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)」は、1年次に全員が履修できるプログラムであり、本学の特徴と言える。象徴科目である「看護と情報Ⅰ～Ⅳ」(1~4年次)の内容と併せて充実を図れるよう検討している。	PROGを2年次及び4年次に実施して、得られた成果を教員にフィードバックを行い、教育効果の中長期的な視点から評価して改善に活かしている。 2024度よりチューター制度を導入し、チューターが担当学生の学修面・生活面のフォローを行っている。特に、令和4年度入学生以降、2年次から3年次への進級要件を設けているが、原級となった学生に対しては、チューターが面談を行い、モチベーションの維持と学修支援を行った。	2022年度入学者から導入した新カリキュラムでは2年から3年へ進級する際の基準を厳格化し、看護国家試験受験にふさわしい学生のみが進級できるようにした。 成績評価においては、シラバスにその基準を明記し厳格に実施するとともに、新年度ガイダンスで、卒業要件に必要な科目の履修を確認し、必要単位が修得できるようアドバイスを行っている。	看護師国家試験の合格率向上を目指し、教務委員会の下部組織である学習支援委員会での対策を強化のうえ取り組んだ。看護師国家試験模擬試験の結果で不合格判定の学生については、夏季の学習を強化するため、7月に保護者を交えた面談を行い、保護者とも一体となった国家試験対策を図った。その結果、必修問題の成績を12月までに底上げすることができた。 外部アセスメント(PROG-N)を活用して定期的に学習効果を測る仕組みを導入し、実施している。2年次生は6~7月に、4年次生は11~12月に実施し、調査結果とDPとを関連付け、学習効果を可視化できるようにしている。 また、DPの達成度を評価するための卒業生調査を毎年企画し、卒業後約1年が経過する卒業生を対象に実施している。 さらに、今年度は就職先施設の職員を対象としたDPの達成度のインタビュー調査を行った。本学卒業生の特徴や卒業後社会に必要とされる能力について、報告書を看護学部内で共有するとともにFDを実施した。	教務委員会が中心となり、各分野別の教員と分野を横断した教員間の連携、旧カリキュラム(4年生)から新カリキュラムへの移行に伴い、教育課程を見直した。 更に、2年生後期に日本看護系大学協議会が試験的に実施するCBT(Computer Based Test)の導入試験に参加し、個々の学生が学習科目の横断的理解と学習進度の統合を図る指導を行う。 DPの達成度を評価するための卒業生調査を毎年企画し、卒業後約1年が経過する卒業生を対象に実施している。さらに、今年度は就職先施設の職員を対象としたDPの達成度のインタビュー調査を行った。本学卒業生の特徴や卒業後社会に必要とされる能力について、報告書を看護学部内で共有するとともにFDを実施し、改善に向けた取り組みを検討することができた。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・看護師養成カリキュラムに沿って体系的に看護を学ぶことができる。 ・数理・データサイエンス・AI教育プロ	【長所】 ・PROG実施によりコンピテンシーの発達段階を把握することができる。 ・チューター制により個別かつ継続的	【長所】 ・進級要件を設けたことにより、看護学科のディプロマ・ポリシーに適った学生が看護師国家試験を受験できるように	【長所】 ・4年生に対する国家試験対策は充実化が図られた。 ・DPの達成度評価として、卒業生調査	【長所】 ・進級要件を設けたことにより、看護学科のディプロマ・ポリシーに適った学生が看護師国家試験を受験できるようになった。

	グラム（リテラシーレベル）を全員が履修できる。 ・履修により情報を適切に収集・分析・活用する能力やデータの解析及び AI の利活用に関する基礎的知識が得られる。	な学修支援を行うことができる。	なった。また、単位履修ができなかった学生と振り返りができた。	および就業先施設調査を行い、客観的なデータによる評価ができた。	・DP の達成度評価となる卒業生調査と就業先調査を行い、それらの結果を元に FD を行い、改善に向けた取り組みを議論した。
	【特色】 ・数理・データサイエンス・AI 教育プログラム（リテラシーレベル）の実施を総合情報学部と連携して取り組むことができていること、象徴科目である「看護と情報Ⅰ～Ⅳ」の充実は本学部の教育の特徴と言える。2025 年度より、仮想総合病院の全診療科に渡る病棟診療録の閲覧と看護記録の記載が可能なシミュレーション版電子カルテを導入し、学生が全診療録の閲覧と看護記録を記載できるシステムを導入した。実習期間中の閲覧に限られていた検査結果や診療記録、指示が閲覧でき、学内でリテラシーレベルの学習と臨床での応用に発展できるリンケージが可能となった。	【特色】 ・PROG により、学生は自分の成長を可視化できる。 ・チューター制により修学が不十分な学生に対して個別性に応じた学修支援が行える。	【特色】 ・進級要件制度を設けたことで、学修が不足している学生を適切に見極めることが容易になった。	【特色】 ・看護師国家試験合格に向けた適切な学習支援を学生に対して実施できている。 ・DP の達成度評価として、卒業生調査および就業先施設調査を行い、客観的なデータによる評価を行っている。	【特色】 ・DP の達成度評価として、卒業生調査および就業先施設調査を行い、客観的なデータによる評価を行い、改善に向けた取り組みを議論している。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・旧カリキュラムと新カリキュラムの並行による教員への負担があった。	【問題点】 ・PROG によるアセスメントと活用の費用対効果をいかに評価するかが検討途中である。PROG の結果を全教員で共有(FD 等)して具体的なアクションプランを立てる必要がある。	【問題点】 ・4 年間で卒業できない学生が増え、個別の学修支援に対する丁寧なフォローが必要である。	【問題点】 ・国家試験対策の成果が表れにくい学生に対する個別対応への丁寧なフィードバックと情報共有が必要である。 ・看護師国家試験の必修問題対策は一定の効果が確認できたが、全国レベルの合格率に達していない。	【問題点】 ・2 年から 3 年次へ進級できない学生に対する個別対応が問題である。
	【課題】 ・学生個々の履修計画と学修支援が必要である。	【課題】 ・PROG によるアセスメントの成果をどのように個々の学生指導に生かすか、費用対効果の測定が不明確である。 ・単位未修得学生に対する丁寧なフォローが求められる。	【課題】 ・学生個々の履修計画と学修支援が必要である。	【課題】 ・学生個々の履修計画と学修支援が必要である。 ・看護師国家試験対策について、合格率を上げるためには、早期から取り組ませる仕組みと個別の手厚い支援が必要であり、対応する人員の確保も課題である。	【課題】 ・学生個々の履修計画と学修支援が必要である。
根拠資料名	教務委員会議事録 学生ハンドブック 2024	教務委員会議事録 PROG 報告書 学生ハンドブック 2024	教務委員会議事録 PROG 報告書 学生ハンドブック 2024	教務委員会議事録 学修支援委員会議事録 卒業生調査報告書、就業先調査報告書 学生ハンドブック 2024	教務委員会議事録 卒業生調査報告書、就業先調査報告書 FD 報告書 学生ハンドブック 2024

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	2024 年度版ホームページを看護学部を受け入れ方針に沿ってリニューアルし、「看護と情報の連携」を紹介する看護学部の冊子を配布、さらに、「看護学部非常事態宣言」を受けて、ホームページの再修正を進めている。また、看護学部の教員が入試・広報課に所属する 2 名の参与とともに、千葉県、茨城県南部、新潟県の高校を訪問し、受験生確保に向けた高校への情報提供を行った。 2024 年度は夏期 3 回に加えて合計 9 回のオープンキャンパスを開催した。内容として、看護基礎教育で学ぶ具体的内容を演習やミニ講義を通して紹介した。複数の入試制度について説明するとともに、在校生によるキャンパス内の紹介、個別ブースで相談への対応を行った。入学選抜制度は、総合型選抜(未来創造型、Ⅰ期～Ⅲ期)、学校推薦型選抜(公募制推薦、指定校推薦、併設校)、一般入試(Ⅰ期、Ⅱ期)、共通テスト利用選抜(Ⅰ期～Ⅲ期)、社会人選抜に加えて、総合型選抜に課題研究型を設け、総合型選抜Ⅳ期を開催したが、受験生の獲得に向けて、看護学部のみⅣ期とⅤ期を新たに設け、多様な学生を受け入れることに努めている。 すべての入試における合否判定は、学長、両学部長、入試広報委員長等でおこなっている。 公正性については、面接を伴う入試では試験官を 2 名配置し、評価指針を明文化して、数値化することで、評点に基づく評価を実施している。	両学部合同の入試・広報委員会を毎月開催し、入試広報活動の全体像を理解し合える体制を整備している。委員会で検討した内容については、看護学部全教員にポータルで通知するとともに、学科教員会に報告した。入試制度の変更等重要案件については、「看護学部将来構想委員会」で検討するとともに、教授会、学科教員会等で意見を聞き、入試・広報委員会での審議に反映した。 入試科目の問題作成に関して、総合型選抜、公募制推薦型選抜の口頭試問については、入学時の基礎学力を評価できる設問を設け、出題範囲をホームページや入試要項で周知している。 一般入試科目の得点状況を翌年の問題作成に反映するために、入試問題作成に関して、入試問題作成委員と入試広報課、作問担当者で話し合いを持ちながら進行している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・オープンキャンパスでは、看護学部における「看護基礎教育の具体的内容」を紹介する「プログラム」を準備し、来場者がプログラムに参加することで、入学後の学習をイメージできるように、入試広報担当の看護学部教員が在学生スタッフと企画・運営を行っている。 ・入試制度については、ホームページの充実を図るとともに、看護学部の教員が入試・広報課に所属する 2 名の参与とともに、千葉県、茨城県南部、新潟県の高校を訪問し、看護基礎教育課程への進学を希望する高校生への本学受験の希望に沿った受験形態を選択できるように情報提供をしている。	【長所】 ・総合型選抜、学校推薦型選抜の合格者に対して、大学が入学前教育(生物基礎)の費用を負担し、化学基礎、英語、数学等の科目については、合格者が費用負担して入学までの期間に学習習慣がなくならないようにサポートを行っている。 ・総合型選抜、学校推薦型選抜の合格者に対して、ビデオ会議を開催して入学前から教員や合格者相互の交流を図っている。
	【特色】 ・総合型、推薦型選抜入試を考えている高校生の来場が多く、複数回来場する高校生は、学生アパートへの入居や入学後の学生生活について、具体的な質問をするようになる。 ・授業料が減免される特待生制度を希望する受験生には、全体説明と個別相談で対応している。	【特色】 ・組織的、伝統的にオープンな学習環境を準備している。入試・広報課と協力して、受験生、合格者に対する密な対応を行っている。特に、総合型選抜、学校推薦型選抜の合格者には、1 月に zoom で、教員と合格者同士の交流会を開催した。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・1 年から 4 年までの在校生が主体的にオープンキャンパスの運営に参加し、より高校生のニーズに合った対応を目指しているが、積極的で充実したキャンパスライフを送っている学生をスタッフとして採用できていない。 ・オープンキャンパスに来場する高校生が、新型コロナウイルス感染症の流行前の人数に戻っていない。	【問題点】 ・受験情報の収集、受験から合格発表、入学手続き、入学前準備等の受験生への時系列の対応窓口の調整が必要と言える。 ・情報の発信力について、受験生が求めている情報を絞り込んで、複数の方法で受験生に伝える方略に改善の余地がある。

	【課題】 ・定員を満たすまでの入学者数に至っていない状況が続いており、看護学部認知度を高める活動と学生自らが看護学部で在籍することの誇りと自信を持てる教育・キャンパスライフのサポート体制を整える必要がある。	【課題】 ・オープンキャンパスの来場者が少ないことで、来場者に「負」の印象を与えている可能性がある。 ・地域包括ケアに貢献できる看護基礎教育に重点を置いているが、高校生や保護者には「地域包括ケア」の認知度は高くなく、魅力として感じられる部分も少ないと評価されている可能性が高い。高度医療・先進医療・先端医療への関心と同等の関心を持たれる広報が必要である。 ・オープンキャンパスの「熱気」や「活気」が受験生と保護者に伝わっていない可能性がある。 在学生の支援を受けて、教員主導のオープンキャンパスから在校生や卒業生中心のオープンキャンパスへのシフトを計画のうえ実施する。
根拠資料名	入学者選抜試験情報 https://www.tuis.ac.jp/entrance/department/ アドミッションポリシー https://www.tuis.ac.jp/nursing/ これからの看護師に求められるチカラとは「看護師ハンド BOOK」 https://my.ebook5.net/tuis/nursing_handbook/ 情報活用・発信力を育てる象徴科目「看護と情報」https://www.tuis.ac.jp/media/kango-leaflet.pdf	入学予定者の皆様へ（入学準備情報） https://www.tuis.ac.jp/entrance/new-student_guidance/

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③
点検項目	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を安定的にかつ十全に展開できる教員組織を編制し、学習成果の達成につながる教育の実現や大学として目指す研究上の成果につなげているか。	教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげているか。	教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいるか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	令和4年度の教員組織の再編成により、基盤看護分野（基礎看護学領域）、成人・高齢者看護分野（成人看護学領域、高齢者看護学領域）、成育看護分野（母性看護学学領域、小児看護学領域）、地域看護学分野（精神看護学領域、在宅看護学領域、公衆衛生看護学領域）の4分野8看護学領域で活動している。そのうち成人・高齢者看護分野で実習はそれぞれ独立して実施していたが、2科目（成人・高齢者看護学実習Ⅰ・Ⅱ）統合化して指導した。	学部教員の資質の向上を目指して、FDを2回開催した。1回目は実習指導者連絡会議として開催し、臨地実習指導者とともに学ぶ機会とした。2回目は喫緊の課題である国家試験合格率を上げる対策と受験生確保のための広報戦略につなげるため、本学の強みと弱みを検討した。	教員の専門性、将来構想をふまえて教員配置を行っているが、定員を満たしていない状況が続いている。教員の評価は、担当科目の授業評価を集計のうえ実施しているが、授業評価の回答率が低迷しているため、ベストティーチャー等の評価に結び付いていない。 また、リサーチマップに登録し、教員の研究・教育活動状況を可視化すると共に、学部年報により教員の活動について評価している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・現行の組織編成により専門性の高い教育・研究が可能となる。	【長所】 ・FD研修後のアンケート、教員、実習指導者がかかえる課題について反映できるようにテーマを設定する。 ・実習指導者が参加しやすいようにオンラインで実施している。	【長所】 ・教員の研究活動を公開することで共同研究の可能性が検討できる。
	【特色】 ・カリキュラムに準拠した教育が可能となる。実習においては領域間の連携が強化され教育効果が高まる。	【特色】 ・実習委員会が中心となり、実習指導、教員の共通する課題についてFDを開催している。	【特色】 ・看護学部の将来構想をふまえた人事計画により、教員の昇格について検討しているが、在籍学生が定員を満たしていない状況が継続しているため、見直しが必要となっている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・教育面では分野・領域間で活動しており、研究は教員が自立して活動を行っている。今後は、学生のニーズに合った教員法の開発と授業・実習への導入が課題となる。	【問題点】 ・国家試験合格率上昇と受験生確保の課題について、教員によっては危機感および取り組みに差がある可能性がある。	【問題点】 ・教員の研究活動の時間を確保するための教員間の役割分担と相互補完体制の整備不足
	【課題】 ・学生の視点に立った看護過程の展開、看護技術やコミュニケーションスキルの習得など、分野を横断する学習法の構築が必要である。	【課題】 ・教員間の課題共有と取り組みをさらに強化する必要がある。	【課題】 ・教員間の情報の共有と重点課題へのマンパワーの集中が必要である。
根拠資料名	・学生ハンドブック 2024 ・大学ホームページ	・2024 年度看護学部 FD 記録 ・2024 年度実習指導者連絡会議資料	・Research map ・2024 年度看護学部年報